

# 「葬式当日の香典返しは弔問者 に対して実は失礼なことです」

## 一年を経過して反響が高まる！

全国的に葬儀のお返しギフトの需要が減少傾向にある。その原因として葬儀の規模の縮小化が挙げられているが、葬儀数が減っているわけ

はない。今最も深刻なのは、葬儀社が半ば強制的に葬儀当日の香典返しだけにしてしまうケースが増えていることではないだろうか。



マナー看板の第1号。四日市市ときわ2-10-14 松本街道ときわ交差点北側

●後発ギフト店「コンシェルジェ」  
実はこの看板を立てる三カ月ほど前に「三重県ギフト小売業協会」ができた。協会を設立したのは、四日市にあるギフト小売店(株)コンシェルジェの伊藤嘉章社長を中心とする三重県内の小売店各社だ。  
伊藤氏は新卒で入社した会社から、ギフト専業ではないにしても、ギフトには仕事で関わってきた。会

●「当日の香典返しは失礼」と啓蒙  
三重県は名古屋と同じ商圏で、香典を受け取らない葬儀はせいぜい一割くらいだそう。ところが、当日の香典返しだけで済まずケースが七割〜八割にまで増えているという。  
そこで、三重県ギフト小売業協会は、お返しギフトのうち、特に香典返しを葬式当日渡すのは正しいマナーに基づかない方式で失礼にあたるので改めるべきだとして、啓蒙を行っている。  
その第一弾として、二〇一四年五月一日、四日市市内に「葬式当日の香典返しは弔問者に対して実は失礼なことです。お返しは四十九日が礼儀です」という啓蒙看板を立てた。  
この看板の場所は葬祭場に向かう途中にある交差点の真ん中で、車の中からでも眼につく場所。看板を見た人から「四十九日の香典返しがいっのまにか無くなって変だと思っていた」といった意見が寄せられている。

「お返しのマナー」を考へてみましたか? 三重県ギフト小売業協会/コンシェルジュ・ギフトサービス

「お返しのマナー」を考へてみましたか? 三重県ギフト小売業協会/コンシェルジュ・ギフトサービス

お電話によるお問い合わせ、お申し込みは **0120-357-458**

受付時間 9:00-20:00年中無休

お返しの時には...

お返し先おしえて!

なぜ香典返しは、たいへん負担なの でしょうか?

香典とは、「おそえのお香」という意味ですが、お葬式の経済的援助という役割も持っているのです。それでは、香典返しの意義って何でしょうか? 答えは、「遺族が申問してくださった方に対し、感謝の気持ちをお届けすること」なのです。

そうは言っても、香典状の文章を決めたり、商品選びや住所録などの作業がたいへんですよね。でも、心配は無用です。これからは、弔問者に対して失礼な「当日返し・即日返し」などに頼る必要はありません。「名簿エクセルシート」だけで包装加工～発送まですべてお任せします。

Q お通夜・お葬式の会場で「香典返し」を配るやり方を葬儀会場の方からすすめられたのですが、失礼な方法でしょうか?

A 弔問者に対して、礼儀をつくる方法ではありません。

千数百年前に仏教が日本に伝来して以来、人は死、葬後7日ごとに生前の罪を赦され、7日後の49日(七七忌)に遺族の祈りが冥途大王に届けば、その人は極楽浄土に行けると思われてきました。仏教で49日は、遺族にとっても弔問者にとっても大切な日なのです。

■この特別な日に、葬儀に弔問してくださった方に感謝の気持ちを伝えることが「香典返し」ですが、「当日返し」ではなく「仏教の教え」や「感謝の気持ち」が忘れ去られて「ただ単に品物や商品券を渡すこと」がひとり歩きしていると言えます。

■「当日返し・即日返し」が「弔問者に対して失礼な美観の例」

① 別の葬儀会館では、葬儀の受付でxxx宛名カードに弔問者自身の香典金を置くことを強制しています。これで弔問者の気持ちを大切にしていると言えるのでしょうか?

② 別の葬儀会館では、受付で弔問者に<香典返し引換券パンフレット>を配布し、弔問者は読覧中にパンフレットの中から商品を選び、出口の

「弊社はかなり後発のギフト小売だから、本来顔を合わせて心のこもった接客をするところをインターネットで実現できないかと考え、コンシェルジュWebショップをつくったのです」。

現在のWeb「コンシェルジュ・ギフトサービス」を見ると、「お祝い事おしえて!」「香典返しおしえて!」

社設立前の一五年間は石鹸・洗剤を主に扱う卸会社に勤務し、百貨店やスーパーに対して中元・歳暮を中心とするギフト商品を提供する業務に携わった。

そうした取り引きを通じて高度な顧客サービスを学んだことにより「人の手による心のこもったお返しを」を熟知したという伊藤氏が会社を設立したのは、二〇〇六年七月だった。



三重県ギフト小売業協会会長  
(株)コンシェルジュ社長 伊藤嘉章氏

Web「コンシェルジュ・ギフトサービス」の内、  
三重県ギフト小売業協会のページ

て!」「内祝いお返しのマナー」などのサイトで、お客様からのよくある質問や想定される質問を提示し、Q&A形式で丁寧に回答を行っている。

また「お客様からのアドバイス」では、これまで同社を利用したお客様からのアンケート回答と顔写真を掲載し、初めて利用する方の参考になるようにしている。

伊藤氏は「ギフトを贈り贈られることは、豊かな人間関係を築くために大事なことだと思っています。そのお手伝いをするのが私たちの使命であると、会社設立当初からコンシェルジュに掲げてきました。だから、儀礼的な形ばかりにとらわれて、本来の愛情や支援や感謝の気持ちを軽視した、ご都合主義のギフト市場にあらををかいていている葬儀社や販売店の方々に一石を投じるつもりでやってきました」と語気を強める。

●塗り替えられた習慣を元に戻す

伊藤氏は「結婚組数の減少や簡略化、出産数の減少で減り続けている内祝いギフトを復活させることは、ギフト販売業の力だけではできない部分が多いが、葬儀社主導で即日返しに切り替えられたために失った四十九日の香典返しは、復活させることができるはず」と考えたのである。

「三重県ギフト小売業協会」を設立してから看板を立てるまでの間に、伊藤氏は香典返しを販売している四日市市内の小売店全てを回り、葬式当日の香典返しの問題と啓発看板を立てる計画を訴え、賛同を得た。並行して三重県内の桑名、鈴鹿、津、松阪、伊勢各市の主要ギフト店からの理解と賛同も得ることができた。

「この看板は販売促進のための広告看板ではないので協会の名前も会社の名前も入れていません。葬式当

日の香典返しは弔問者に対して失礼なことだ、ということを知っていたら、消費者の皆さんにどうすればいいのかを考えていただくことが目的なのです」。

なぜ失礼なのか、また、自分が喪主や遺族の立場になったとき、どのような選択をすればいいのかについては、同協会のホームページで説明をしている。

「葬儀に弔問してくださった方に感謝の気持ちを伝えることが香典返しですが、即日返し」では仏教の教えや感謝の気持ちが忘れ去られて、ただ単に品物や商品券を渡すことがひとり歩きしています。だからといって、ギフト販売業の都合だけで四十九日の香典返しを消費者に押し付けることもあってはならない。仏教の教えや感謝の気持ちを大切に、香典返しの意味と正しいマナーを啓蒙してはじめて、ギフト販売業の社会的責任を果たせるのではないかと考えています」。

伊藤氏は、全国各地でこうした啓蒙啓発の波が大きく広がっていくことを願っている。